
ハッピーライフ

エルルウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーライフ

【Zコード】

Z2134F

【作者名】

エルルウ

【あらすじ】

とある普通の高校生、清水晴斗はある事情により幼なじみの柊瑞希と暮らすことになった。

初恋（前書き）

多少エロくなるかも知れません
頑張ります

初恋

俺の名前は、清水晴斗

高校一年生、数年前に、両親が他界して、少し前までは一人暮らし
だったのだが今は幼なじみの柊瑞希と暮らしている。

瑞希と暮らすことになつた理由は瑞希の親の急な出張で一年間ぐら
い帰つて来れないといつもので今は、一緒に暮らしている。

「晴斗くん朝ですよ～、早く起きてください。」

「ん、うへ… ん、瑞希か？」

もひ、朝か…と思ひながら目を開いた。

「おはよ〜いやあこます。晴斗さん、早く着替えて、下に降りて来て
ください」と言つて瑞希は部屋を出ていつた。

俺は瑞希が部屋を出て行くのをぼんやりと見た後着替えを始めた。

そして、着替えが終わり部屋を出て一階の居間に向かつた。

一階に降つると、瑞希は朝食の準備を終えて椅子に座るところだつ
た。

「おはよう瑞希、今日も早いな！」

すると、瑞希は苦笑いをしながら

「おはよ〜いやあこます晴斗くん、でも私が早いんじゃなくて、晴斗
くんが遅いだけよ～！」

「そりかな?、別に普通だと思ひけどな～

まあいいや、とつあえず朝飯食おうぜ」

はい、と言つて明るく笑つた瑞希と朝食を食べ始めた。

食事の途中に、

「そういえば、いつの学校明後日テストですが晴斗くんちゃんと勉強しますか？」

「テスト？… と声のトーンを下げて答えた。

「あの、晴斗くん… まさかとは思つんですけど、知らなかつたんですか？」

「うん、テストがあるなんて聞いてないんですけど… 僕はどうしたらいいんですか…？」 またも、瑞希は苦笑いを浮かべながら

「とりあえず、部屋に戻つて勉強したほうがいいんじゃないですか」
その言葉を聞いて俺は自分の部屋に戻つていった。部屋に戻つてさあて、何からやるかと独り言を言いつつ、机を見て最初に見えた数学の教科書を広げて勉強を始めた。

勉強を始めて数時間がたつた頃だつた。
不意に

「晴斗くん、お昼ご飯を作つたんで持つてきました～！」
と瑞希が入つてきた。

「あれ、もうそんな時間だつけ？」

瑞希は、明るくはいと答えて持つてきた物を小さいテーブルの上に置いた。

俺は、はああと大きなあくびが出た。

すると、瑞希は不意に俺の顔の真横から顔を出し勉強中のノートを覗き込んできた。

俺は驚いて下を向いた。顔が赤くなつていいくのが自分でも分かつた。
そつ、俺は瑞希に恋をしている。

すると、ノートを見ていた瑞希が不意にこっちは顔を向けて

「いや、間違つてますよー」と言つてやった。

俺は焦りながら、は、はい、と曖昧な返事をしてしまつた。

「どうしたんですか？」

「顔が赤いですよ？」

「いや、何でもないよ、何でも、それよりも僕の飯を持ってきてくれたんだろ、じゃあ僕飯食うわ」

焦りながら答え小さいテーブルの横に座つた。

すると、

「わ、わたしも僕の飯食べていいいですか？」

「い、いいけど テーブル小さいけどいいのか？」

瑞希は、嬉しそうに笑みをうかべて、はい、と答えて向かい合ひつようになつた。

俺は顔が赤くなりながらも、もくもくと僕の飯をたべた。

昼ご飯を食べ終わつて瑞希は、食器を片付けてきましたと黙つて部屋を出でいった。

俺も勉強を再開した。

それから、また数時間が経つた。

でも、勉強が頭に入らない。

それに、さつきから瑞希のことが頭から離れない。

少しでも間が開くたびに瑞希の笑顔を思い出してしまつ。

くや、ちょっと頭冷やしに散歩でもいくかと小声で言つて部屋に置き手紙を置いて家を出た。

家を出ると、辺りはすっかり茜色に染まつており、太陽が沈みかけていた。

「さてと、川原でもいくかなー」と言しながら 川原に向かって歩き出した。

歩くこと十五分ほどで川原に到着した。

到着した時には太陽も沈んでいて辺りも暗くなり始めていた。

川原では、特にやることもなかつたから仰向けになつて星を見ていた。

何時間そうしていただろうか

だけど、川原に来て仰向けになつてからも考へるのは瑞希のことばかりだつた。

ざつざつざつと誰かが近づいて来る足音が聞こえる。足音はどんどんと近づいて来て俺の近くで止まつた。

「もう晴斗くん、こんな所に居たんですか～」

それは、瑞希だつた。

「み、瑞希？あれ、なんでここ？」

「だつて夕飯の支度が出来ても帰つて来ないから心配になつて…」

瑞希は少し焦つたように言つた。

ふ、ははは、と俺は笑つていた。

「な、何も笑わなくとも」

瑞希の顔がみるみる赤くなる

「い、ごめん、あんまりおかしかつたからせー…」

でも、ありがとう」瑞希は顔を赤らめながらも、どういたしまして、と言つた。

それを見て俺は頭の中がクリアになつて、自然とその言葉を口にしていた。

「瑞希、俺 瑞希のこと好だ」

「え

少しの沈黙の後

瑞希が口をひらいた

瑞希は、不安そうに俺の顔を見て

「わ、私なんかでいいんですか?」

「瑞希じゃないとダメなんだ!」

瑞希は少し考えた後恥ずかしそうに

「私も晴斗くんのことがずっと前から好きでした」

と言つて俺の前に来て自分の唇と俺の唇を重ねてキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2134f/>

ハッピーライフ

2010年11月16日03時10分発行